

ご挨拶に代えて がんばろう日本篆刻家協会

副理事長 事務局長 真鍋井蛙

寒い毎日、そしてコロナ禍の渦中、皆様には如何お過ごしでしょうか。一月十二日付で理事会の書面審議のお願いをしましたが、常任顧問、会長、理事長、副理事長、代表理事、常務理事、理事、そして印社代表の先生方のご賛同をいただき、理事長決裁という形で、無事二〇二〇年度の事業報告から二〇二一年度の予算、事業計画を總會（書面）に提出することができ、コロナ禍の渦中ではございますが協会の総力をあげて前に進んでおります。

三十七回日本篆刻展も五月十五日から二十三日まで例年通り、兵庫県立美術館王子分館で開催予定、授賞式も感染対策を十分に考え五月二十二日に行います。第十三回日本篆刻家協会役員展（古河展）も六月二十六日から八月二十六日まで篆刻美術館も開催の予定で動いてきています。中央研究会につきましては、どうしても密を避けることができないと判断し、残念ではございますが中止ということになりました。そこで理事長の発案で会員の皆様の技術や興味関心の向上をはかることを目的とし、蘭亭詩の分刻を考慮しております。詳細につきましては後日連絡させていただきます。

篆刻の歴史を考えてみますと、スペイン風邪が一九一八年から数年間、大流行し、全世界で五億人が感染したとされています。一九一八年は大正七年、梅先生が二才から三才の頃です。この頃、書道会では何があったのかを調べてみますと、京都の平安同好会から平安書道会が誕生しています。中心人物の山本竟山五十五才、長尾雨山は五十四才です。大阪では益田石華が書道雑誌「書道」を創刊しています。私の調べた範囲では流石に一九一八年には大きな動きはありません。これが何を意味するか我々は考えなければなりません。書面での理事会、總會、そして今後の行動は、先人を学ぶと共にその生き様をも学び、我々日本篆刻家協会も会長、理事長を中心に結束し、脈々と続く印史の中に協会の名を残していこうではありませんか。

祝井谷五雲理事長 詩画浙江文旅友好使者 就任

副理事長 喜多芳邑

浙江省政府は、「詩画浙江」を積極的に宣伝し、グローバルリズムの具体的な対策を実施しております。今年に入ってから、「詩画浙江」をテーマに、様々なプロジェクトとイベントが行われ、十一月三日に、浙江省主催「詩画浙江」の国際人文化交流ウィークが開催されました。浙江省の各文化施設や、教育機関、観光名所などの推薦と省政府の厳しい選考によって、文化と観光に関する、最も積極的に活躍されている三〇名の外国籍者が「詩画浙江文旅（文化観光）友好使者」として選ばれ、国際人文化交流ウィークに於いて発表されました。日本人の四人中ひとり、井谷五雲理事長であります。井谷理事長はオンラインにて参加されました。西冷印社社務委員会は、井谷先生のほか、もう一人フランス国籍の名誉社員龍楽恒常先生を推薦し、二人とも省の「文旅友好使者」に選ばれました。西冷印社、日本篆刻家協会にとっても大変名誉な出来事です。

井谷先生は個人的にも交流をされていますが、日本篆刻家協会西冷印社名誉社員（社員十人展）、西冷印社在日社員座談会、西冷印社一一五周年系列活動、また神戸開催の西冷印社四君子展等の成功が高く評価されました。井谷先生は、この荣誉は自分一人では成し得ず、協会の皆様のご協力によるものであると深く感謝されております。本来なれば報告とともに祝賀会とは思いますが、コロナ禍、日篆協藝報にてのご報告とさせていただきます。

理事長 井谷五雲

永坂石埭の資料をあれこれ漁っていると、多くの書畫集や漢詩集、また著名人士や芸術家などの書籍の巻頭に、石埭翁と並んで巖谷一六が封面題字などを揮毫しているのをしばしば見る。石埭翁は江戸弘化二年（一八四五）の生まれで、一六は後述のように一八三四年生まれ、一六の方が十一才ほど年上である。ともに幕末に藩医の家に生まれて学問に励み、書画は勿論のこと、漢詩を善くしたという共通点を持つている。ともに東京に出て貴顕と交わり、社会的にも高位であったので、著作物の巻頭を委嘱されることも当然と言えば当然であろう。

石埭翁は梅の名所月ヶ瀬に魅入られて、先咲庵という小さいながらも別荘を建て、月ヶ瀬に赴くこと生涯に四十回を超えた。その月ヶ瀬から車で小一時間ほどのほど近い所に、一六の出生地である水口町がある。私はそのことに頓着しなかったのだが、月ヶ瀬での石埭翁の詩碑の採拓の後、門人のひとりが水口に「一六記念館なるものがあるので、今から出かけてきます」と言つて一六記念館を訪れたようである。それは春とは言えまだ寒い早春のことであった。

およそ書や篆刻を学ぶ者で「一六」の名を知らない者はない、と言つても過言ではない。その親しみやすい「一六」という名によるのであろうか。言わずと知れた「明治の三筆」の一人としてその書名は極めて高い。その三筆は幕末明治期、初代中日公使である何如璋の随員として来日した楊守敬に書学書法を問い、日本の江戸時代以来の旧式の書道の概念を覆したことは、日本書道史の一大エポックであるということも知らぬ者はない。我が国の近代書道の嚆矢として重要な役割を担ったのである。楊守敬はいわゆる漢魏六朝の碑版類の拓本等の膨大な資料を船載したのだが、一六のあの歪んだ結体はその結果である。一六については少々物足りないものだが、愛知県春日井市の道風記念館のホームページの紹介文を記す。

巖谷一六 天保五年（一八三四）〜明治三十八年（一九〇五）

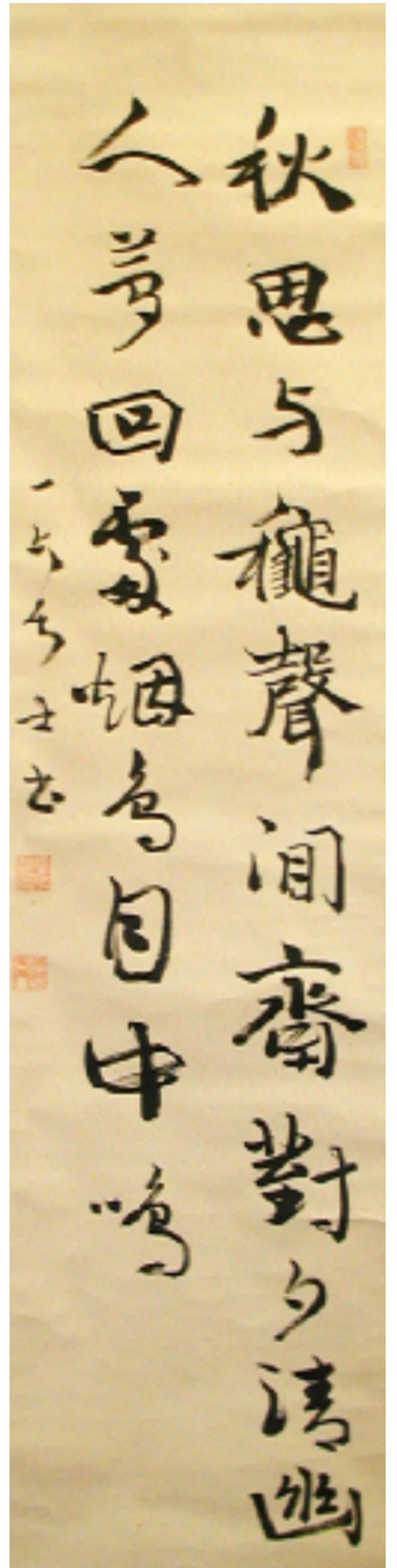
「近江の人、名は修、字は誠卿。別号迂堂・金粟道人・古梅園等。医業を廃し官僚となり、貴族院議員となった。始め中沢雪城に師事。日下部鳴鶴らと共に楊守敬より書道を学んだ後、独特の書風を打ち立てた。画詩文も能くした」

一六の出身地である水口町は、東海道の宿場町として栄えた古くからの城下町である。現在は滋賀県甲賀市水口町となっている。町の中央には市中を一望できる小さいながら単独峯である大岡山がある。その山頂に羽柴秀吉の命を受けて築城した水口城があつたが、関ヶ原の戦い時に廃城、今はわずかに残る石積みに往時を偲ぶのみである。その後、新たに平地に水口城が築城され、今は天守閣はないものの、石垣の影を映す堀が静かなたたずまいを見せて、床しい。地元では山頂の旧水口城を岡山城と呼んで、市民の散策する憩いの場所であるようだ。その岡山城から降り下つたところに大岡寺（だいこうじ）という寺がある。その創建は白鳳十四年とあるから、何と千三百年以上も前のことで、行基の手によるものだという。この大岡寺の一角に顕彰碑「従三位巖谷君之碑」がある。篆額は楊守敬、撰文は三島中洲、日下部鳴鶴の書丹になるものである。おそらくは修少年（一六）がわんぱく時代の遊び場であつたであろう大岡山、そして大岡寺の境内。一六居士の面影を見る思いである。一六の墓所は京都東山の正法寺にあるが、両親の墓はこの水口にある。この静かな田舎町にも少しく都会化の波は押し寄せる。町中にある水口歴史民俗資料館の一室に「巖谷一六・小波記念室」がある。小波は一六の六人の実子の六番めの子供で本名は季雄（すえお）。日本児童文学の先駆者として有名である。

さて、観光ガイドのようなことを書き連ねてきたが、石埭翁探索の余波は多方面に及び、多くの余録を齎してくれた。この水口町の隣にはやはり東海道の宿場町の形を色濃く残す土山宿がある。この土山も、今は昔の感を拭えないが、往時を偲ぶ我々に繋がる様々な文化遺産を今に残している。先人の足跡を辿る旅行は洵に楽しく有意義で、篆刻書画に携わることの喜びを再認識する瞬間でもある。コロナ終息を祈りながらのことだが、再度出かけたいたい思いである。



▶ 右上 / 大岡寺
 左上 / 水口城（新建）
 右下 / 一六・小波記念室
 （水口歴史民俗資料館）



▶ 一六の書

○年改組新第七回日展出品者・入選者

会員出品 尾崎蒼石

入選 井谷五雲 出田塘葭 喜多芳邑 黒田玉洲 小朴圃

関踏青 中村葉舟 真鍋井蛙 東尾高岳 古溝幽哇

新入選 小上玉菡 戸出九廬

月例課題成績発表（令和元年～令和二年七月）

役員 寺田和仁 10回

常委 武田黎秀 7回（常任委員として4回 委員として3回）

岡崎戯石 5回 田中紅珠 5回

委員 井上秋鹿 7回

相川良孝 5回 遠藤幽篁 5回

※成績優秀者には後日賞品をお送り致します

「行必果」

役員
(平田蘭石選)



道男



米子人



正歩



華紅



章石

- 浅野道男 山崎井泉
- 遠藤孝人 倉野看雨
- 坂正歩 鈴木惠草
- 福谷華紅 山吹緑
- 古瀬章石 津田秀風
- 磯村育治 山村千秋
- 畑間青露 古野燕安
- 川崎白水 計五五人

良い作品なのに、印箋全体を見た時バランスが悪かったり、文の始まりがわかりにくいものがありました。気をつけると良いと思います。

常任委員
(伊佐治祥雲選)



墨石



澄山



春壽



容史子



静山

- 長谷山墨石 奥島柳浦
- 水中澄山 山口藤華
- 澁谷春壽 岡崎巖石
- 大城容史子 平中霞舟
- 潘定静山 鈴木桂峰
- 白幡雪峰 永田敏石
- 中井榮子 真田雅好
- 田中紅珠 計四三人

「行必果」三文字の場合、一文字・二文字の布字か二文字・一文字の布字にするかによって、朱文・白文及び余白等の工夫の仕方が大きく左右します。そのため印稿の段階でいろいろ作ってみてより面白い個性ある印の出品を期待します。

委員
(石原豊玉選)



萩露



信夫



勝山



耕石



英昭

- 大塚萩露 袴田恵理子
- 松村信夫 藤田紅霞
- 大野勝山 栗永美舟
- 鈴木耕石 鈴木素風
- 小林英昭 藤田勉
- 中野桃華 井上秋鹿
- 兼子悦治 堤黄瑞
- 壹岐玲風 計四二人

三字の画数の少ない課題で布字に、苦勞した跡が見られる。印笺、盤印、変形印等、色々な作品出品でした。特に必ずしも難しめの作品があり、盤印、変形印等、興味本位に走らないように、基本をしっかり勉強してください。

会員
(出田塘霞選)



一革



龍泉



寛明



草心



青榴

- 片岡一革 吉田哲幸
- 池内龍泉 秋吉隆夫
- 茂中寛明 尾畑翠庵
- 吉田草心 山中徹人
- 松島青榴 岡本君代
- 杉本加世 林正樹
- 伊藤光彦 國本学
- 小林媛瑠 計四四人

今回は字数、画数の少ない課題で変化をつけるのが難しかったようです。その分、印の形に変化を求めたものが多く見られました。また、押印の悪い作品が目立ちました。ぜひ、押印の量等細心の注意を払いたいものです。

「舉杯邀明月」

役員
(真鍋井蛙選)



和仁



六朗



游月



秀風



正歩

- 寺田和仁 細川恵苑
- 松永六朗 倉野看雨
- 橋本游月 田原具山
- 津田秀風 立石見聲
- 坂正歩 山村千秋
- 木村容庸 青木雄山
- 渡邊尚石 萬谷碧風
- 松本弘碩 計五三人

今回は「邀」字が問題となろう。この字は「邀」と同字通用字としているが、「邀」は徹から分化した字で、一般的にこの字の篆は徹に作る方がよいとおもう。

常任委員
(大村雪陵選)



容史子



極浦



霞舟



唯文



澄山

- 大城容史子 西野克衛
- 奥島極浦 青山正人
- 平中霞舟 澁谷春壽
- 堂守唯文 伊谷昌子
- 水中澄山 西岡賢美子
- 田中紅珠 池谷宝樹
- 音川景香 稲垣竹扇
- 潘定静山 計四一人

課題は五字で二列と三列の配字がほぼ半数で、この場合、二行目が窮屈になりがちですが、画数の少ない月字も存在感を示す布字にしたいものです。筆字を一行的場合には、筆字が二文字に見えない工夫が必要でしょう。

委員
(奥田農生選)



杏芽



英昭



菅玉



秋鹿



智子

- 植田杏芽 八木正明
- 小林英昭 堤黄瑞
- 中本菅玉 藤田紅霞
- 井上秋鹿 鈴木耕石
- 山本智子 田邊進
- 袴田恵理子 鈴木素風
- 大崎漢白 浦田紫雲
- 大塚萩露 計四二人

五文字の印文で、二、三の二行印が大半でした。この場合、二行目が窮屈になりがちですが、画数の少ない月字も存在感を示す布字にしたいものです。筆字を一行的場合には、筆字が二文字に見えない工夫が必要でしょう。

会員
(梶川久美子選)



草心



和彦



武



翠庵



徹人

- 吉田草心 平子正江
- 服部和彦 久下浩登
- 小出武 浅井千賀子
- 尾畑翠庵 吉田哲幸
- 山中徹人 林正樹
- 広森勝竹 大森多恵子
- 松島青榴 寺地寿和子
- 小林媛瑠 計四一人

今月、五文字の布字は各人がそれぞれの考え方で二行(二・三行)・一・二・三(一・二・三)と多彩であったが、「舉」の誤字が多く見られ、その中でも数点の印が残念な結果となった。

10月課題 「從心」

役員
(伊藤雅夫選)



井泉



秀鳳



千秋



白水



游月

○山崎昇泉 浅野江涯
○津田秀鳳 倉野看雨
○山村千秋 萬谷碧風
○川崎白水 寺田和仁
○橋本游月 丸山沙舟
○浅野道男 遠藤米子人
○岡田桂舟 鈴木惠草
○永野草草 計五二人

「從心」の二文字、ともに字例が豊富なので創意が掻き立てられたことと思います。その中で、二字がよく調和して無理のない作品を選出しました。

常任委員
(北室南苑選)



紅珠



極浦



克衛



管城



霞舟

○田中紅珠 西岡賢美子
○奥島極浦 鈴木真壽男
○西野克衛 中島敬次
○中本管城 井上秋鹿
○平中霞舟 番定静山
○岡崎巖石 池谷玉樹
○伊谷昌子 武田黎秀
○澁谷春壽 計四一人

「從」は粗画の字形もあり、「心」字との組み合わせをいかに様に工夫しやすく、従って個性を充分に發揮でき、魅力的な作品が多かった。ただ、策を弄する線質が目立つ作風が少なからずある点は少々残念な面もある。

委員
(草田翠苑選)



杏芽



管玉



白龍



秋鹿



秋露

○植田杏芽 境山正甫
○中本管玉 兼子悦治
○松波白龍 渡會俊正
○井上秋鹿 藤田勉
○大塚秋露 大芦御雲
○喜岐玲風 堤黄瑞
○山崎耕石 池田薫花
○山崎游石 計四一人

今回四十点(半通印数点を含む)を審査して、印稿を作る段階がとて重要であると感じた。このをしっかりとしないと、良い作品は出来ない。どうすれば、もつと篆書そのものを理解する事が大切であるが、まずは形から。

会員
(熊本夕生選)



浩登



龍泉



精



小舟



幽篁

○久下浩登 相川良孝
○池内龍泉 尾畑翠庵
○明石精 城本朴園
○貴島小舟 浅井千賀子
○遠藤幽篁 服部和彦
○吉田草心 中野紀美子
○國本孝 佐野霞美
○平本正江 計四二人

金文・古璽・呉昌碩風や満白の印など、いろいろな作風の作品が出品された。ただ、印泥の質の悪いものや、印泥の量が多すぎて精度の低い印影が多く見られたのは残念です。

11月課題 「觀自在」

役員
(黒田玉洲選)



素翠



芳泉



秀鳳



緑



尚石

○宮越素翠 橋本游月
○安井芳泉 松永六朗
○津田秀鳳 名倉克彦
○山吹緑 古野燕安
○渡邊尚石 山崎昇泉
○浅野江涯 福谷祥雲
○岡田桂舟 木谷劉石
○秋山捷華 計五四人

四四％が小篆印案、残りが甲骨、金文、古鈔風。朱白別では、二対二で朱文が多かった。余白をどうにか目立ち、左列「觀」は誤字が目立ち、右列「在」は分間空白に失敗が多く三文字の纏め方に苦勞の跡「觀」の場合「自在」は繁が良いか疎が良いか…?

常任委員
(田中修文選)



五岳



喜雨



雪峰



黎秀



極浦

○小松五岳 中井繁子
○井畑喜雨 田中紅珠
○白幡雪峰 滝口照影
○武田黎秀 平中霞舟
○奥島極浦 永田乾石
○高橋忠義 番定静山
○岡崎巖石 橋田惠蓮子
○木谷劉石 境山正甫
○高木啓志 高橋子路
○山本智子 計三七人

今回の作品は、見せ方と多彩な書体を駆使し手慣れた表現を感じました。ただ誤字と思われる文字が多用で、余白をどうにか持ってくるか各々工夫して刻されておられた。自在のあついで全体の構成がよく感じられる余白と輪郭の強弱で印の味が出て、バランスよくまとめられている。

委員
(堤白遊選)



秋鹿



悦治



游石



信夫



勉

○井上秋鹿 八木正明
○兼子悦治 藤田紅霞
○山崎游石 小林邦夫
○松村信夫 植田杏芽
○藤田勉 喜岐玲風
○高橋忠義 橋田惠蓮子
○木谷劉石 境山正甫
○高木啓志 高橋子路
○山本智子 計四二人

三文字の印文なので、観を一字あつかいの朱文印が多かった。余白をどうにか持ってくるか各々工夫して刻されておられた。自在のあついで全体の構成がよく感じられる余白と輪郭の強弱で印の味が出て、バランスよくまとめられている。

会員
(戸出九廬選)



草心



翠庵



まゆみ



徹人



恵子

○吉田草心 林正樹
○尾畑翠庵 相川良孝
○本間まゆみ 庄田真紀子
○山中徹人 小出武
○大夢恵子 橋本陽一
○遠藤幽篁 茂中寛明
○池内龍泉 高橋子路
○秋吉隆夫 計四〇人

課題が三文字の場合、まず考えるのはどの文字を一字にするかです。今回は圧倒的に「觀」が多数を占め、「在」を一字にした作品は、一点だけでした。その他には、半通印や横一列に構成した作品などもありました。

12月課題 「辛丑」

役員
(黄平齋選)



白水



仁美



正歩



宗里



緑

○川崎白水 山崎井泉
○片畑仁美 宇崎崎碧峯
○坂正歩 磯村育治
○吉田宗里 磯藤米子入
○山吹緑 浅野祥雲
○近藤湖蝶 浅野江涯
○渡邊尚石 木村容庸
○名倉克彦 計五人

今回辛丑印の表現形式と字体選用は骨文、金文、転文、九疊文を豊富に用いた。魅力的な個性が高い。但し、大文字の統一性は欠く。大小篆混用、随意に甲骨文、金文、金文十印篆などを常に発見、また信用できず、字典の参考は大事。細引氏の『篆書大字典』は要領用。

常任委員
(中村葉舟選)



容史子



紅珠



乾石



榮子



極浦

○大城容史子 井畑喜雨
○田中紅珠 西岡貴子
○永田乾石 高橋忠義
○中井榮子 中本管城
○奥島極浦 永井恵子
○奥島極浦 滝口照影
○向畑芳翠 東緑園
○堂守唯文 計八人

今回の課題「辛丑」は偏旁もなく、画数も少ないので小さな印材で刻いたものに佳印が多くありました。語句にあった印材の大きさ、形状を選ぶことも大切だと思います。

委員
(長谷川帰海選)



玲風



恵理子



紅霞



杏芽



正明

○豊岐玲風 木谷劉石
○袴田恵理子 兼子悦治
○藤田紅霞 山本智子
○植田杏芽 中島幸園
○八木正明 三宅溪月
○中森紫香 境山正甫
○堀黄瑞 藤田勉
○大野勝山 計一人

ヘンとソクリの無い簡単な文字二文字を治めるのはかえって難しい。ひと工夫が欲しい。全体に秀作は少なかつた。これはと思う作品は、又字になっていたり、印泥の付きが悪かつた。

会員
(長谷川拓石選)



幽篁



正義



蘇晨



飛雲



武

○遠藤幽篁 大宮多恵子
○森下正義 貴島小舟
○川野蘇晨 浅井千賀子
○奥島極浦 佐野真咲美
○小出武 尾畑翠庵
○吉田草心 小林媛瑠
○久下浩登 吉田哲幸
○相川良孝 計三九人

千支が課題の為、各々印に工夫が見られ、良い印が多数有りました。その中でも上位の十印程は、甲乙つけがたく、困りました。今一步とした半数程の印も、少し手を加えれば上位の印になると思います。

1月課題 「延年」

役員
(渡邊和琴選)



管城



繁治



霞舟



尚石



敏子

○中本管城 上田静雲
○増田繁治 浅野祥雲
○渡邊尚石 丸山沙舟
○奥島極浦 宮越素翠
○南敏子 乃村翠琴
○福谷華紅 安井芳泉
○寺田和仁 松本清苑
○吉田和仁 計五七人

今回の課題は朱文と白文と同数の出品でした。二文字という事で、その中で空閑の処理はなかなか難しい。多く見受けられ、秀作揃いでした。その中でも上位の十印程は、甲乙つけがたく、困りました。今一步とした半数程の印も、少し手を加えれば上位の印になると思います。

常任委員
(古溝幽畦選)



喜雨



秋鹿



唯文



極浦



榴華

○井畑喜雨 荒井典恵
○井上秋鹿 西野克衛
○堂守唯文 鈴木真壽男
○奥島極浦 西岡貴美子
○金井榴華 音川景香
○岡崎戯石 高橋忠義
○中井榮子 武田黎秀
○兼子悦治 計三九人

新年にさわしく馴染みのある語句であった。それだけに色々な工夫も数多く見受けられ、秀作揃いでした。その中でも上位の十印程は、甲乙つけがたく、困りました。今一步とした半数程の印も、少し手を加えれば上位の印になると思います。

委員
(松本雅至選)



勝山



恵理子



秋露



知子



溪月

○大野勝山 浅井千賀子
○袴田恵理子 尾畑翠庵
○大塚秋露 木谷劉石
○長川知子 植田杏芽
○三七溪月 相川良孝
○片岡一華 浦田紫雲
○藤田紅霞 中島幸園
○池田霞花 計四四人

有名な印文でもあり、秀作も多く見受けられました。延年の組み合わせは、或る程度に決まっています。字書からの引用だけでは、うまく刻せぬも表情や風格の乏しい印になりがちです。文字に関する資料を集め、参考にしてください。

会員
(御手洗眉山選)



幽篁



蘇晨



淳



正雄



草心

○遠藤幽篁 誤島石
○川野蘇晨 庄田真字
○井形淳 浜戸三徳
○岡田正雄 池内龍泉
○吉田草心 秋吉隆夫
○佐野真咲美 城本朴園
○伊藤光生 永宮飛雲
○大宮多恵子 計三二人

今月は「一字印」のこともあり無理な構成はあまりありませんでした。ただ、冬期は印泥が固くなりやすいためか不鮮明な印影が多かつたのは残念なことです。印紙を用いた二度押しもぜひ試みてください。

文房古玩「白磁の文房具」

《その三 筆筒・筆架》

副理事長 酒居石荘

筆筒とは

筆を立てておく筒状の器。巻いた紙を立てておく胴部の長い筒状の器を紙筒という。同じような形状だが高さ、用途の違いによる。

○形状

・円筒形のものも多く、方形筒、多角形筒、菱形筒、変形筒などがある。

○材質

・竹、木、陶磁器、象牙、玉、石、銅など金属、漆器などがある。

筆架とは

筆をもたせかけておく台。筆を一時的に寝かせて置く枕のようなもの。筆掛け。

○形状

・山字形のものも多く、三山、五山と連ね凹部を多くしたものもある。筆を置き転がらない凹部をもつ形が工夫され、動物形、雲形、靈芝形、帯鉤形など種々みられる。

○材質

・陶磁器、石、金属、玉、木、ガラスなどがある。



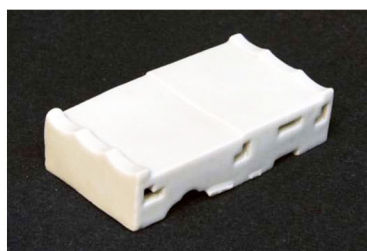
▶ 筆筒



▶ 筆架三種



▶ 硯屏



▶ 墨牀(床)二種

《その四 硯屏・墨牀》

硯屏とは

硯のそばに立てて、ちりやほこりなどを防ぐ小さな衝立。

○形状

・衝立全体を成形したもの。板状にしたものを木や漆などの台にはめ込んだものもある。

○材質

・陶磁器、漆器、石、玉、金属などいろいろなものがある。

墨牀(床)とは

磨りかけの墨を置くと磨り口が濡れていると机上を汚すことや、硯の上に置いておくと含まれる膠により硯から離れなくなる。これを防ぐため墨を置いておく台。

○形状

・種々あるが、硯とセットになるものだけに大きなものはない。

水滴、筆架等複合形もある。

○材質

・陶磁器、玉、石、金属などがある。

《その五 絵具皿 その他》

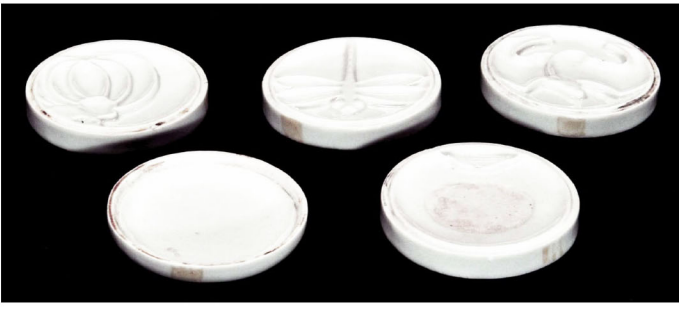
絵具皿は色を見るため白磁が多い。その他、いろいろな文房諸具がある。ネットサーフィンすると各種のものを見ることがができる。



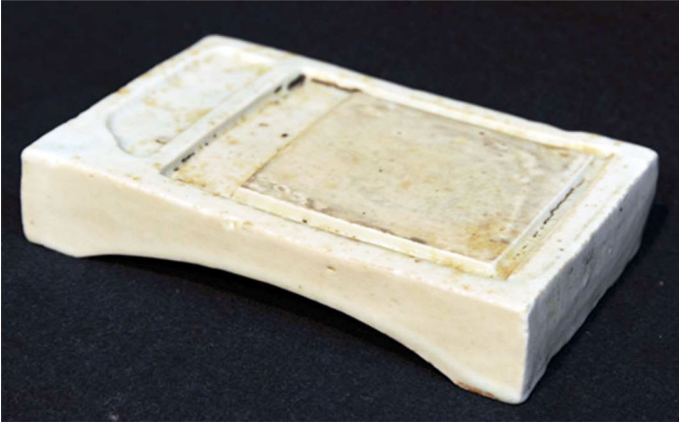
▶ 琮形小壺



▶ 絵具皿



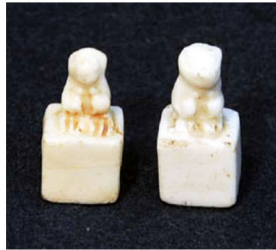
▶ 絵具皿



▶ 硯



▶ 印材

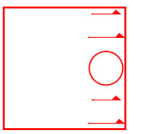


■ 展覧会のご案内

- 第九回名古屋聴濤印会展 六月十五日(火)～二十日(日) 名古屋市市民栄ギャラリー 七階
- 第三十九回六轡会展 八月十八日(水)～二十二日(日) 京都文化博物館
- 第三十六回畦石舎展 十月二日(土)～三日(日) 日図デザイン博物館

※本年度の社中展等、開催予定がございましたら事務所までご連絡ください。

一 年度事業計画



- ◆ 四月三日(土)・四日(日) 第三十七回日本篆刻展審査準備・審査
兵庫県立美術館王子分館(原田の森ギャラリー)
- ◆ 五月十九日(水)～五月二十三日(日)
◇ 第三十七回日本篆刻展 特別展観「張耕源書画篆刻作品」
第三十六回展 理事以上役員・上位入賞者作品
併催 第五回日本篆刻家協会学生展
兵庫県立美術館王子分館(原田の森ギャラリー)
- ◆ 五月二十二日(土) 午後二時三〇分～
授賞式 原田の森ギャラリー 四〇一号室
- ◆ 六月二十六日(土)～八月二十六日(木)
◇ 第十三回日本篆刻家協会役員展 古河篆刻美術館
- ◆ 十一月十三日(土) 午後三時～ 常務理事会 錦城閣
- ・ 分刻印譜(蘭亭詩)十一月発行予定
- ・ 日篆協藝報(ニュースレター)発行
- ・ 西冷印社第十屆篆刻芸術評展(案内済)
- ・ “百年印証” 万印楼当代篆刻芸術大展(九月上旬開催予定)

本年度は読書法展や日展は開催予定で運営されています。また各地方展も感染対策を講じながら、概ね開催されていることと思います。一同に会することには未だ困難を要しますが、与えられた作品制作の機会を存分に活用し、自己の研鑽に努められんことを期待いたします。